ディプロマ・ポリシーによる授業評価の授業間比較

―１回生科目・２回生科目・３回生科目の比較―

幼児教育講座・深田昭三

１. 対象とした授業

本報告では，以下の４つの授業を対象として，ディプロマ・ポリシーによる授業評価を実施した。

(1) 乳児保育（1 回生科目）

保育士養成コース対象の１回生科目で，同コースの必修科目である。この授業のうち８コマでは，えひめ乳児保育園の上岡先生を実地指導講師として招聘し，保育現場での生の資料や，体験的な学習も含めてサポートしていただいている。DP に関しては，「知識・理解」と「技能・表現」に関連しているとしている。

(2) 言葉の指導法（2 回生科目）

幼稚園免許（１種必修，２種選択）にかかわる２回生科目である。保育士養成コースの必修科目でもある。この授業では，自分の大切なものを家から講義室に持ってきてスピーチする「Show & Tell」，受講生の前で行う絵本読み，全員分のレポートを綴じて作る文集作りなどの取組を行っている。DP に関しては，「知識・理解」，「思考・判断」，「技能・表現」に関連しているとしている。

(3) 総合演習（3 回生科目）

保育士養成コース対象の３回生科目で，同コースの必修科目である。この授業では，受講生が３名程度の小グループに分かれ，それぞれの興味や関心を深め，共同して自主的な学習を深め，調査や作品製作などの実体験を通して学び，最後にプレゼンテーションを行う点に特徴がある。DP に関しては，「思考・判断」と「態度」に関連しているとしている。

(4) 幼児心理学演習（3 回生科目）

幼年教育専修の３回生科目である。保育士養成コースの選択科目でもある。この授業では「Young Children」という全米幼児教育協会の機関誌の中の論文をレジュメにまとめて発表し，討議する授業である。DP に関しては，「知識・理解」と「思考・判断」に関連しているとしている。

表 1. ディプロマ・ポリシーによる授業評価項目

１．知識・理解
1A 教育に関する知識の修得
1B 得意分野の専門的知識の修得
２．思考・ 判断
2A 教育をめぐる現代的諸課題の理解
2B それへの適切な対応策のあり方についての思考力･判断力の修得
３．技能・表現
3A 教育活動に必要な高い技能の修得
3B 教育活動に必要な豊かな表現力の修得
４．関心・意欲
4A 自己の学習課題の明確化
4B 理論と実践を結びつけた主体的な学習への意欲の喚起
５．態度
5A 専門的職業人としての使命感や責任感の形成
5B 多世代にわたる対人関係力の育成

２. 授業評価と集計

対象とした授業においても最終回に，受講者全員を対象として，表 1 に示したディプロマ・ポリシーによる授業評価を実施した。各授業の受講生数を学年別・性別に分け，表 2 に示した。1A～5B までの各項目に対して，「この授業は DP にいかに貢献したと思いますか」と問い，「十分貢献した(4)」「貢献した(3)」「あまり貢献しなかった(2)」

表 2. 各授業の受講生数

	学年					性別		合計
	1	2	3	4	院生	男	女	
乳児保育	12	0	0	0	0	1	11	12
言葉の指導法	0	19	8	0	1	2	26	28
総合演習	0	0	10	1	1	2	10	12
幼児心理学演習	0	0	8	1	0	1	8	9
合計	12	19	26	2	2	6	55	61

「授業の目標・内容がこの DP とは無関係であった(1)」の 4 件法で回答を求めた。

３．評価結果と考察

授業ごと，DP の小項目ごとに受講生の回答を平均し，その結果を表 3 に示した。

(1) 全般的な傾向

全体的な傾向をみてみると，「貢献した」に相当する 3 点以上の項目が 33 項目あり，3 点を割った項目は 7 項目のみであった。このことから，今回の授業が，全般的に見て DP の各項目に「貢献した」と，学生から捉えられていたと言える。

項目ごとの平均を見ると，「知識理解」の 2 項目（1A と 1B）が他よりも高い傾向にあった。授業別に見ても，総合演習をのぞき，どの授業においても最高得点は「知識理解」である。「知識理解」以外の項目では，授業ごとに高い低いが分散していた。このことから，演習的な授業や実体験型の授業であっても「知識理解」に貢献すると捉えられていることが分かる。

学年が上がるに従って平均値が若干下がる傾向にあった。科目ごとのサンプルが小さく確定的とは言えないものの，どんな専門的な知識，技能も新鮮に感じられる 1 回生に対し，ある程度の知識・経験を得てきた 3 回生は，学生ごとに個別的な興味・関心を持つようになったことの結果かもしれない。

(2) シラバスの DP と学生の意識とのズレ

シラバスでは，各授業が DP のどの側面と関連するのかを提示しているが，学生へのアンケート結果とは必ずしも一致しなかった。

一致していたのは，「知識・理解」をシラバスでの関連項目としていた「乳児保育」「言葉の指導法」「幼児心理学演習」である。学生もこれらの科目で「知識・理解」への貢献があったと評定していた。しかし，「思考・判断」をシラバスでの関連項目にしていた「言葉の指導法」「総合演習」「幼児心理学演習」のうち，「言葉の指導法」「総合演習」の「思考・判断」への貢献を，学生は高く評定していなかった。同じことは，シラバスで「技能・表現」を関連項目としていた「乳児保育」や，「態度」を関連項目としていた「総合演習」でも言える。

このことから，シラバスで DP のどの側面と関連するのかを決定するときに，より慎重に授業の中身を吟味し判断すること，また，授業の中でも取り上げた DP を意識しながら進めることの必要性を再認識しなければならないであろう。

さらに言えば，比較的明瞭かつ包括的な目標である「知識・理解」に比べて，他の項目の規定では困難さが伴い，そのことが DP をアセスメントしにくいものにしている可能性も考えられる。

たとえば「思考・ 判断」は「2A 教育をめぐる現代的諸課題の理解」「2B それへの適切な対応策のあり方についての思考力・判断力の修得」とされている。そのため，授業で「現代的諸課題」が中心的なテーマとして取り上げられなければ，仮にその授業で「思考」や「判断」が活発に賦活されたとしても，DP に貢献したと評定されない。「現代的諸課題」についての思考が大切なことは言うまでもないが，現代的諸課題でなければ教師として思考する意味がないとも言えないのである。

４．最後に

DP を決定し，それを意図的，系統的なカリキュラム体系の中で実現していこうとする試みは，教育学部にとっても喫緊の課題である。しかし，現場教員にとって重要な資質を列挙して DP を作り，それらの資質に資する授業であったのかどうかをそのまま測るやり方には，もう少し理論的なバックボーンと，測定の工夫が必要なようにも思える。ただし，今回取り上げた例は一部の，しかも単年度の事例である。今後ともデータを積み重ね，DP 測定にかかわる問題意識をさらに掘り下げていきたい。

表 3. ディプロマ・ポリシーによる授業評価の結果

	知識理解		思考判断		技能表現		関心意欲		態度		平均
	1A	1B	2A	2B	3A	3B	4A	4B	5A	5B	
乳児保育	4.00	3.73	3.55	3.36	3.55	3.18	3.55	3.64	3.73	3.45	3.57
言葉の指導法	3.71	3.64	2.93	2.89	3.46	3.54	3.00	3.00	3.32	2.93	3.24
総合演習	3.17	3.25	3.17	3.08	3.25	3.25	3.25	3.17	3.17	3.33	3.21
幼児心理学演習	3.11	3.22	3.22	3.11	2.67	3.00	3.22	2.67	2.78	2.71	2.97
平　均	3.50	3.46	3.22	3.11	3.23	3.24	3.25	3.12	3.25	3.11	3.25

注：それぞれの授業で，平均以上の得点であった項目に網掛けをした。
表中の数値は，「十分貢献した(4)」，「貢献した(3)」，「あまり貢献しなかった(2)」，「授業の目標・内容がこの DP とは無関係であった(1)」を示す。